# 2023 年度「中国ろうきんＮＰＯ寄付システム」応募用紙_様式 2

【目的】

私たちはどのような病気で最期を迎えるかは選ぶことができませんが、どの様な状態でも、どう暮らすかは選択できます。

看取りが近づいてもまだ食べられる時期に食べる支援を受けることができ、じっくりと話しを聴いてくれる人が地域にいてくれると、その地域での看取りがより豊かなものになることが期待できます。

当NPO法人は、食べる支援・生きる支援が必要としている人に届くよう、食べる支援や聴くことができる仲間を増やし、誰もが「困りごと」を聴けるまち、暮らしの中で看取りができる社会の実現に寄与することを目的として活動しています。

●〈暮らしの中の看取り〉準備講座

日頃考えることを避けてしまいがちな「看取り」を自分事として考え、これから地域で療養する人が増えるであろう「がんのこと」や「認知症のこと」を学びながら、地域で最期まで安心して暮らすために自分たちにできることは何かを考えてきました。

2014 年秋から広島県廿日市市で開始し、2020 年 3 月までに 26 回開催しましました。2020 年 4 月以降は新型コロナの影響でオンラインでの開催としましたが、そのことが功を奏し、講師も参加者も、県外や海外のかたがたとつながり、幅広い方々にご参加いただける市民公開講座となりました。

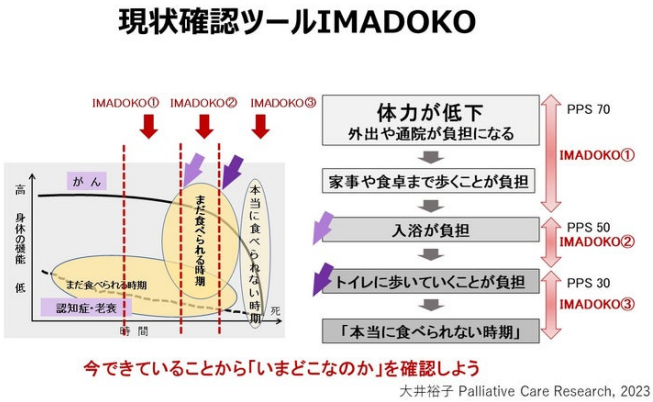
2023 年は、徐々に集合型でも開催できるようになり、さらに 2 年間のオンライン開催のノウハウにより、集合型+オンライン配信や、現地だけでなくオンライン上でも同時に小グループに分かれてのワークショップができるハイブリット型での開催も可能となり、この一年で 10 回開催し延べ 508 名の方に参加いただくことができました。

# 2023 年度「中国ろうきんＮＰＯ寄付システム」応募用紙_様式 2

市民と医療介護従事者がともにグループワークをすることで、一般の方にも地域の医療介護専門職の方との繋がりを持つことができ、各専門職がどんなことをしているのかを知る場にもなります。また、医療介護専門職の方には一般の方がどんなことで悩んでいるのか、どんなふうに考えているのかを知る場にもなっています。

参加された方の中からは、家族を看取った経験やご自身の闘病経験をいかし、今度は自分たちが地域のために活動したいという方が現れ一緒に活動をしています。また、ここで学んだことを活かし最期のときまでどう過ごしたいか家族の希望を聴いておいたことで、ケアマネジャーやヘルパー、訪問診療医、訪問看護師、理学療法士や言語聴覚士の方などとうまく連携がとれ、在宅療養でビールを最期まで楽しみ、希望通り家族が見守るなか自宅で看取ることができたという方もおられました。

また、11 月 5 日には第 60 回の〈暮らしの中の看取り〉準備講座を公益財団法人正力厚生会の助成により開催し、同時に
「みんなで活用する　現状確認ツール IMADOKO」というリーフレット（B5版8P）を発行することができました。
いまどこなのかを確認し共有することによって今すべきことが見えてきます。
「在宅がベスト」とか「ホスピスがベスト」とか、そういうことではなく、その人の希望、その家族の置かれた状況に応じて、その人たちにとってのベストな提案をすることができるチーム、地域があれば良いと願い、共同代表理事である緩和ケア医：大井の監修のもと制作したものです。




●食事と介護の困りごと相談
広島県廿日市の地名にちなみ毎月 20 日に、ゆめタウンはつかいちのレストラン街と、廿日市あいプラザ 1 階ホールにて隔月で開催し、医療介護専門職と市民サポーターが相談をうけています。2023 年は G7 サミットの警備による交通規制の影響で 5 月が中止になった以外 11 回開催し、42 名の相談を受けました。

●くみサポの家
そこへ行くと聴いてくれるひとがいる、気軽に相談できる仲間がいる場所をつくろうと、2024 年より東京都小金井市でも毎月第４日曜に、わくわく都民農園小金井プラムで開催することを計画していますが、その前身として 10 月に地域のイベントにブースを試験的に開設し 9 名の相談を受けました。